

認定こども園せんだい幼稚園 園長 田原 慎也

自分だけではない拠りどころを持つ

2/6(月)から2月中旬まで、得度習礼のために長らく園を空けておりました。ご不便・ご迷惑をお掛けしました。京都への出発前に保護者の方や知り合いから「修行に行くんですね」とお声掛けいただきました。会話を進めると、「冷たい滝に身を打たれる」「断食をする」といった苦行をイメージされている方もいらっしゃったようですが、浄土真宗本願寺派の得度習礼ではそのようなことは行わないのです。

一国の王子としてお産まれになったお釈迦様は何不自由のない生活を捨てて出家し、自ら過酷な修行に取り組まれました。しかしながら、どんなに苦行を続けていても悟りを得るところか、「自分の思い通りにしたいという自我」と「思い通りにはならない現実」との狭間は埋まることなく、考えれば考えるほど結論が出ません。

そうこうしているうちにみると身体は痩せ細っていき、「このような修行をもってしても人智を超えた特別な洞察を得られなかった。他の方法があるはずだ。」と考えられ、苦行を止めて瞑想を始め、悟りを開くに至られました。
【紀元前5世紀の仏教の始まり】

また、浄土真宗の開祖である親鸞聖人は9歳で出家され、20年間もの間、比叡山で勉学・修行に励まれました。しかし、どんなに苦しい修行を重ねても自力では悟りを開くことができないという現実や、何度試みても捨てきれない己の煩惱(満たされずにいくらでも欲しいと求める欲、欲が妨げられて沸き起こる怒り、他人をねたんだり、不幸を喜んだりする気持ち)の深さに一層と気づかれるのでした。

そして、親鸞聖人は20年の修行から離れ、比叡山を下りることを決断され、自らの修行や努力(自力)ではなく、阿弥陀様の力(他力)によってすべての人が救われるという教えに出会われるのでした。

【1200年頃の浄土真宗の始まり】

同じ場所において同じ経験をした人たち同士に、「どんな経験をされたのですか?」と質問しても必ず異なる答えが返ってきます。事実は1つであっても、「人」を通してそれが語られたときには、事実ではなくそれぞれの見方や物差し、価値観によってその人なりに意味づけられた「脚色された事実」に変わります。

「こんなに自分は相手のことを考えたのに……」と、精一杯悩みに悩んで出した答えであっても、自分の口から出てくる以上、その答えが自我(私の思いや主義、主張など)から切り離されたものになることはありません。厳しい修行の末にあらためて己の煩惱の深さに気づかれたお釈迦様や親鸞聖人の「み教え」や「エピソード」は、いろいろなことをついつい自分のことだけを中心に考えてしまっている「私」という存在に気づかせてくれるのです。

だからと言って、煩惱から離れることはできないということをご正當化して人々が自分という物差しだけで生きる。そんな未来には欲・怒り・妬みのぶつかり合い、競争、闘争など、結果的に不幸な状況ばかりが積み重なっていきましょう。主観的な自分の心のみを満たすだけでは真の幸福はもたらされません。

せんだい幼稚園では、0~5歳の子どもたちが「生活」する場として、「共に生きる」中で、「共に生きる」ことを目指しながら、取り組んでまいりました。さまざまな人同士が共に生活する場はうまくいかないことだらけです。そのような「うまくいかなさ」と向き合いながら、「自分さえ」という心から少しずつ離れて、調和や協調を得ていく。自分を取り囲む環境が良くなることで自分の豊かさに繋がっていく。そのようなことを少しでも子どもたちに感じてもらいたいと願い、取り組んできました。至らない点も多くあったかと思いますが、進級しても卒園しても引き続き、子どもたちや子どもたちの社会が良くなるよう全力でサポートしていきたいと思っております。

早くも、本年度最後のお便りとなりました。ご卒園・ご進級おめでとうございます。1年間、園運営にご協力賜り本当にありがとうございました。